

論 文

小学校教育実習に関する成果と課題についての一考察(2)  
～実習生と実習校の意識調査からの考察～

松本大輔・佐藤範男・松井克行・川上 貴

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成26年1月9日受理)

**A Study on the Successes and Challenges for Practice Teaching of Elementary School (2)**  
**— A study of awareness survey on Student teachers and Schools in practice teaching —**

Daisuke MATSUMOTO and Norio SATOU and Katsuyuki MATSUI and Takashi KAWAKAMI

*(Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University)*

(Accepted January 9, 2014)

## 論 文

# 小学校教育実習に関する成果と課題についての一考察(2) ～実習生と実習校の意識調査からの考察～

松本大輔・佐藤範男・松井克行・川上 貴

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成26年1月9日受理)

## A Study on the Successes and Challenges for Practice Teaching of Elementary School (2)

### — A study of awareness survey on Student teachers and Schools in practice teaching —

Daisuke MATSUMOTO and Norio SATOU and Katsuyuki MATSUI and Takashi KAWAKAMI

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's Studies, Nishikyushu University*)

(Accepted January 9, 2014)

#### Abstract

The purpose of this study is to study on the successes and challenges for practice teaching of elementary school

The analysis methods were contents analysis of awareness survey on student teachers and schools in practice teaching.

As the result successes and challenges of practice teaching elementary school were five points.

Successes points were two.

- 1) Power of relationship with students.
- 2) Basic manner as the student teachers.

Challenges points were three.

- 1) Lesson plan and study on teaching materials.
- 2) Abilities lesson practice.
- 3) Lack of Responsibility, enthusiasm and motivation in practice teaching of elementary school

Especially lesson plan and study on teaching materials were a low evaluation

In this study, it was revealed that it was necessary to educate student teachers' abilities lesson plan and study on teaching materials in future.

Key words : Practice Teaching of Elementary School 小学校教育実習

Awareness survey 意識調査

Contents Analysis 内容分析

## I. はじめに

学問的・専門的な知識の習得のみならず、実際に児童に関わりながら、教材研究、授業実践、実践の省察という知識の活用力を伴う実践的な力量の育成をも教員養成段階で求められている状況の中、教育実習の役割は教員養成段階における教師としての実践的力量を身につける重要な役割を担っている。

しかし、一方で、本来、教育実習に参加すべき能力や意欲のない学生が実習に参加する事による実習公害と言われる問題も叫ばれている。つまり、教育実習に送り出す大学側の実習指導の質的な向上が求められていると言えよう。特に、地域との連携による教員養成を目指し、佐賀市と協定を結んだ本学の子ども学部においては、今後、一層、地域との結びつきを強くしていくために、実習指導の充実及び、実習参加に関する基準の設定と、送り出す実習生の質を高めるような指導を行う必要がある。こうした課題に対して松本ら（2013）<sup>1)</sup>は平成24年度の小学校教育実習後に、実習生と受け入れ先の実習校に対して意識調査を行い、小学校教育実習における成果と課題についてまとめた。本研究ではその研究を受け、平成25年6月に小学校教育実習を行った実習生と受け入れ先の実習校に対して行った意識調査の結果を考察することで、今後の小学校教育実習指導改善への手がかりを得ることを目的とした。

## II. 研究方法

### 1) 調査対象

平成25年6月に佐賀市にて小学校教育実習を行った本学4年生70名（実習生）及び、佐賀市内の小学校教育実習受け入れ先32校（実習校）、を対象とした。有効回答数は実習生より63及び実習校より74であった。

### 2) 調査内容

本調査では実習生、実習校に共通の内容として「教育実習生として足りないと思われたこと」、「教育実習生として評価できるといったこと」についての調査項目を意識調査内容とした。これらの調査内容に関して自由記述によって回答された内容を分析対象とした。

### 3) 分析方法

平成24年度の小学校教育実習に関する意識調査における自由記述の内容の分析に対して、松本ら

（2013）<sup>1)</sup>が Berelson（1957）<sup>2)</sup>の内容分析を用い分析している。そしてその結果として、「実習生及び実習校を対象とした『教育実習生として足りないと思われたこと』について」という調査項目において、実習生の自由記述から7カテゴリー、実習校の自由記述から5カテゴリーを作成している。本研究では、このカテゴリーをもとに、「教育実習生として足りないと思われたこと」について実習生及び実習校の自由記述の内容を分析し分類していく。また「実習生及び実習校を対象とした『教育実習生として評価できるといったこと』について」という調査項目において、実習生の自由記述から4カテゴリー、実習校の自由記述から4カテゴリーを作成している。本研究では、このカテゴリーをもとに、「教育実習生として評価できるといったこと」について実習生及び実習校の自由記述の内容を分析し分類していく。

よって本研究は昨年度の意識調査の結果から作成されたカテゴリーを基に内容分析を行い分類していく事とする。なお昨年度作成されたカテゴリーに分類できない記述に関しては新たなカテゴリーとして作成し分類する事とする。

## III. 分析結果

### 1) 実習生及び実習校を対象とした「教育実習生として足りないと思われたこと」について

#### 1. 実習生の結果について

実習生が「教育実習生として足りないと思われたこと」に対する自由記述では170の記述を記録単位数として分析対象とした。これらを松本ら（2013）<sup>1)</sup>が作成したカテゴリー（表1）から分類していく事とする。

表1 (table. 1) 実習生が「教育実習生として足りないと思われたこと」に関する分析カテゴリー表

カテゴリー名
授業に関する授業力・指導力不足
授業に関する指導案作成力や教材研究不足による 授業計画力不足
子どもへの見取りと対応力不足
子どもを注意すること、叱ることの難しさ
体調管理
基礎的な学力の不足
その他

まず、「授業に関する授業力・指導力不足」の категорияについてであるが、このcategoryは「発問内容」、「発問内容の工夫」、「言葉の言いまわし」など授業の中での伝える力、声掛け、さらに、「適切な指導」、「授業の進め方」など授業における「授業や指導に関する事柄」などの実際の授業場面における授業力・指導力に関する内容から構成されている。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同categoryに分類されると考えられる記述が100記述と圧倒的に多く、59%を占める第1categoryとなっている。この中でも、適切な指導や、授業の進め方、板書、時間配分、指導技術等に関する記述は56記述であり、発問内容、発問の工夫、言葉の言い回し等の発問に関する記述は44記述である。この発問等に関する記述は昨年度よりも割合的に多くなっている。このことは、本年度の実習生が授業の中での、発問の難しさを痛感し自ら足りないところであると評価しているということであろう。

次に、「授業に関する指導案作成力や教材研究不足による授業計画力不足」のcategoryであるが、このcategoryは、「単元に関する知識不足」、「漢字の知識」などの「教科に対する知識不足」、「指導案作成」に関する内容、「教材研究が不十分」、「漢字の筆順」、「板書」などの内容の「教材研究不足」に関する内容から構成されている。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同categoryに分類されると考えられる記述が35記述で全体の21%を占める第2categoryである。

三つ目のcategoryとしては「子どもの反応に対する対応力」、「子どもに対する目配り」、「集団をまとめる力」等の「子どもへの見取りと対応力不足」というcategoryである。これらは授業内外において子どもの様子を観察し、適切に対応する、教師としての学校教育全般に関わる指導力に関する記述である。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同categoryに分類されると考えられる記述が7記述で、4%を占めている。

さらに四つ目は「子どもを注意すること、叱ることの難しさ」というcategoryである。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同categoryに分類されると考えられる記述が9記述で5%を占めている。その他としては、体調管理、表情が固かった、教育実習に関する自覚が足りない等の記述が少数見られた。これらをまとめたのが表2である。

表2 (table. 2) 平成25年度実習生が「教育実習生として足りないと思われたこと」に関する分析category一覧表

category名	記録単位数(%)	H24
授業に関する授業力・指導力不足	100(59%)	37(34%)
授業に関する指導案作成力や教材研究不足による授業計画力不足	35(21%)	34(31%)
子どもを注意すること、叱ることの難しさ	9(5%)	10(9%)
子どもへの見取りと対応力不足	7(4%)	18(17%)
体調管理	2(1%)	4(4%)
その他(自覚・態度・表情・社会常識等)	17(10%)	2(2%)

表2からも読み取れるように、授業に関わる二つのcategoryで実習生が足りないと捉えている要因が80%を占めている。しかし、昨年度と違い、「授業に関する授業力・指導力不足」の割合が高まり、「授業に関する指導案作成力や教材研究不足による授業計画力不足」の割合が減少している。つまり平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは、実習生が足りないと思われる観点としては、「授業に関する授業力・指導力不足」の割合が高いことが理解される。またその中の、発問に関する内容が多くなっていることから、実習生が実習の中で発問の難しさを感じているといえよう。

この他には昨年度と同様に子どもを注意すること叱ることや、子どもへの対応などの子どもとの関わりという学校教育全般に対する指導力が第3,第4categoryとして挙げられている。これらより、教師として子どもに授業を行う事や授業を考えること、子どもと接する事という教師としての教師力全般に関して実習生が足りないと捉えていることが読み取れる。

## 2. 実習校の結果について

実習校が「教育実習生として足りないと思われたこと」に対する自由記述では148の記述を記録単位数として分析対象とした。これらを松本ら(2013)1)が作成したcategory(表3)から分類していく事とする。

まず「板書計画」、「指導案作成、授業計画力」、「教材研究力」の三つの内容からなる「授業に関する指導案作成力や教材研究不足による授業計画力不足」というcategoryである。平成25年度の小学校教育



表3 (table. 3) 実習校が「教育実習生として足りないと思われたこと」に関する分析カテゴリー表

カテゴリー名
授業に関する指導案作成力や教材研究不足による授業計画力不足
授業に関する授業力・指導力不足
子どもの発達段階への理解の不足
積極性・熱意に対する欠如
特になし

実習における意識調査からは同カテゴリーに分類されると考えられる記述が72記述見られた。これは、全体記述の49%を占める第1カテゴリーである。この内容は「教材研究不足」や「指導案の書き方が出来ていない」、「板書の字」等に関する記述であり、実習校が足りないと思われたことの第1カテゴリーである。さらにこの内容の記述として、昨年度よりも、「筆順間違いが多い」、「正しく漢字が書けていない」等の「板書の字」に関する記述が増加しており19記述も見られた。これら「板書の字」に関する記述に関しても、単なる漢字に関する基礎的な学力の問題を越えて、各学年で習う新出漢字に対する教材研究や指導案を作成の際の「板書計画」としての準備不足に関する事柄であると考えられる。よって同カテゴリーとして分類したが、この問題は、実習生自身の意識の問題を越えて、小学校教育実習指導を含めた各指導法の中でも留意すべき事項であると考えられるため、このカテゴリーを「授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画等の不足による授業計画力不足」という様に、カテゴリーネームに板書計画を加筆したカテゴリーとした。

その他のカテゴリーとしては、「授業に関する授業力・指導力不足」カテゴリー、「子どもの発達段階への理解の不足」カテゴリー、「積極性・熱意に対する欠如」、「特になし」である。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは「授業に関する授業力・指導力不足」カテゴリーに分類されると考えられる記述が僅か2記述で1%を占めるにとどまっている。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは「子どもの発達段階への理解不足」というカテゴリーに関する記述は見られず、「子どもを叱ること」、「子どもを注意する事」、「授業外での子どもへの接し方」等の「子どもへの対応」というカテゴリーとして捉えられた。しかし、このカテゴリーも7記述であり、全体の3%を占める程度で

ある。

次の「積極性・熱意に対する欠如」カテゴリーに関する記述が30記述見られ、全体の20%を占めるカテゴリーとなっている。また「教職に対する自覚が足りない」や「責任感が少し弱い」等の記述による自覚や責任という内容で構成される記述を同カテゴリーとして含めると35記述、24%を占める第2カテゴリーとなる。昨年度の11%から倍以上の割合となっている。平成25年度の小学校教育実習における意識調査においては、「自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如」カテゴリーが第2カテゴリーとして実習校から足りない力として捉えられているといえよう。最後に「特になし」は32記述で、22%を占めている。これらをまとめたのが表4である。

表4 (table. 4) 平成25年度実習生に対する実習校が「教育実習生として足りないと思われたこと」に関する分析カテゴリー一覧表

カテゴリー名	記録単位数(%)	H24
授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足	72(49%)	21(56%)
自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如	35(24%)	4(11%)
授業に関する授業力・指導力不足	2(1%)	4(11%)
子どもへの対応	7(3%)	
特になし	32(22%)	4(11%)

表4からも読み取れるように実習校が「教育実習生として足りないと思われたこと」に関する記述の約50%を「授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画等の不足による授業計画力不足」が占めている。このカテゴリーは昨年度の56%とほとんど変わっておらず、依然として実習校からは実習生が足りない力として捉えられていることが理解できよう。また実際の授業に関するカテゴリーの記述がほとんど見られないことを踏まえると、実習校としては、まず指導案作成や教材研究、板書計画等の、授業計画力不足という実習生としての事前の準備に対して力が足りないと思われていることが理解される。この課題は、小学校教育実習における最大の課題であると考えられ、実習生の個人の問題として捉えられる問題を越えて、教員養成としての本学部の問題として、より重要な課題として捉えていく必要がある。

またその他のカテゴリーに関して、「自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如」カテゴリーが、昨年度の11%よりも大幅に増え24%を占める第2カテゴリー

リーとなっている。この問題は、昨年度に比べ、小学校教育実習を希望する学生が大幅に増えた問題との関連も考えられるが、実習公害へと繋がる重要な問題であると考えられる。将来小学校教諭を志望しておらず免許取得のみの実習生であったとしても、4週間先生として学校現場にいる以上、しっかりとした自覚や責任、意欲等を持たせる必要がある。その他の「特になし」というカテゴリーが昨年度よりも増えたのは、昨年度の結果を踏まえた、小学校教育実習指導の成果とも捉えられる。

### 3. 「教育実習生として足りないと思われたこと」について

以上の実習生、実習校が「教育実習生として足りないと思われたこと」に対する自由記述では実習生、実習校において幾つかの相違点及び特徴を捉えることができた。両者のカテゴリーに関して一覧表にまとめたのが表5である。

表5 (table. 5) 平成25年度小学校教育実習における「教育実習生として足りないと思われたこと」に関する実習生と実習校の分析カテゴリー一覧表

実習生		実習校	
カテゴリー名	記録単位数 (%)	カテゴリー名	記録単位数 (%)
授業に関する授業力・指導力不足	100(59%)	授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足	72(49%)
授業に関する指導案作成力や教材研究不足による授業計画力不足	35(21%)	自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如	35(24%)
子どもを注意すること、叱ることの難しさ	9(5%)	授業に関する授業力・指導力不足	2(1%)
子どもへの見取りと対応力不足	7(4%)	子どもへの対応	7(3%)
体調管理	2(1%)	特になし	32(22%)
その他(自覚・態度・表情・社会常識等)	17(10%)		

表5からは、まず実習生からの記述では、「授業に関する授業力・指導力」が全体の59%を越える説明力を持つ第1カテゴリーとして分析されたのに対して、実習校からの記述では「授業に関する授業力・

指導力」に関するカテゴリーは1%でしかなく、「授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足」という授業を計画する力不足のカテゴリーが全体の約50%を第1カテゴリーとして分析された。これは、実習校が授業を行う事に関しての実習生としての足りない力よりも、指導案作成や教材研究という授業計画段階での力を重要視しているという捉え方ができよう。つまり、授業の指導力という事よりも、その授業を行う際の授業計画段階での力を小学校教育実習に関しては求めているという結果であると考えられる。この実習校の分析は昨年度と同様の結果と言える。この結果を踏まえ今後、学部として実習生として求められる力の育成を考えるのであれば、指導案作成と教材研究などの授業計画力の育成が重要であろう。

平成25年度の小学校教育実習生に対しては、平成24年度の小学校教育実習生における小学校教育実習指導よりも、より模擬授業演習の中で、教材研究や学習指導案づくりの時間を設けた。具体的には、国語研究班、算数研究班、理科研究班、社会研究班とグループを分け、各教科について教材研究を深め、実際に授業を行った。また授業後は授業協議会と称して、授業や教材について議論をする場を設定した。さらにその授業協議会での反省を踏まえ、再度指導案を練り直し、再び授業を行うこととした。このようにただ授業を行うだけでなく、小学校6年間のカリキュラムを見通した授業づくりや教材作りをよりじっくりと行う時間を設けた取り組みを行ってきたが、来年度以降より質的に高めていく必要があるといえよう。これらは小学校教育実習指導のみならず、各教科指導法とも連携し教員養成としての本学部の教育内容の問題として捉えていく必要がある。

実習生からの記述で特異な部分として昨年度と同様に「子どもを注意すること、叱ることの難しさ」が挙げられよう。これらは「子どもへの見取りと対応力不足」というカテゴリーと同様に、教師という立場における責任感と、子どもと接する事という教師としての教師力全般に関して育成していく必要のある力であると捉えられる。

また、実習校からの記述における「自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如」カテゴリーが、昨年度の11%よりも大幅に増え24%を占めるカテゴリーとなっている問題は、実習公害へと繋がる重要な問題であると考えられる。先述したが将来小学校教諭を志望しておらず免許取得のみの実習生であったとし

でもしっかりとした自覚や責任、意欲等を持たせる指導が必要である。

## 2) 実習生を対象とした「教育実習生として評価できると思ったこと」について

### 1. 実習生の結果について

実習生が「教育実習生として評価できると思ったこと」に対する自由記述では135の記述を記録単位数として分析対象とした。これらを松本ら(2013)<sup>1)</sup>が作成したカテゴリー(表6)から分類していく事とする。

表6 (table. 6) 実習生が「教育実習生として評価できると思ったこと」に関する分析カテゴリー表

カテゴリー名
子どもとかかわる力
授業に向けての努力を含む教育実習生としての基本的態度
授業での指導に関する事柄
実習に対する積極性や真摯な態度

まずは、「子どもとかかわる力」というカテゴリーである。このカテゴリーは、「子どもとしっかりかかわれたこと」や「子どもと距離が近づけた」、「子どもと仲良くなれた」「子どもとたくさん遊ぶ」などの内容から構成されている。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同カテゴリーに分類されると考えられる記述が54記述見られ40%を占める第1カテゴリーである。このカテゴリーは昨年度と同様に実習生が評価できると思ったことに関する第1カテゴリーである。

さらに、「授業に向けての努力を含む教育実習生としての基本的態度」というカテゴリーである。このカテゴリーは「提出物の期限を守った」、「遅刻・欠席をしなかったこと」という「実習生としての規則」という内容や、「授業への取り組みに対する努力」という内容から構成されている。この中で、「授業への取り組みに対する努力」という内容は、頑張れたという意味の文脈として捉えられており、「授業に向けての努力を含む教育実習生としての基本的態度」という内容として同カテゴリーとして構成されている。これらは、時間やきまりを守ること、教育実習生であっても教師として努力すること、という実習における実習生の基本的態度としてのカテゴリーとして分類できると考えられたためである。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同カテゴリーに分類されると考えられる記述について

65記述見られたが、昨年度と違い、「提出物の期限を守った」、「遅刻・欠席をしなかった」という教育実習生としての基本的態度よりも、「研究授業へ向けて努力したこと」、「指導案作成を頑張った」等の「授業への取り組みに対する努力」に関する記述が多く見られるカテゴリーとなっている。その為、ここでは、「教育実習生としての基本的態度」という24記述18%を占めるカテゴリーと、「授業への取り組みに対する努力」という39記述29%を占めるカテゴリーを区別し分類した。

さらに授業での「少しだけ授業で子どもたちに伝えられた」や「個人指導でわかってもらえた」等の成功体験による「授業での指導に関する事柄」というカテゴリーに関しては平成25年度の小学校教育実習に関する意識調査からは、7記述で5%である。また「積極的に活動した」や「できるだけ自分から動けた」、「あいさつを頑張った」という「積極性や真摯な態度」という内容による、「実習に対する積極性や真摯な態度」というカテゴリーは11記述8%であった。これらをまとめたのが表7である。

表7 (table. 7) 平成25年度実習生が「教育実習生として評価できると思ったこと」に関する分析カテゴリー一覧表

カテゴリー名	記録単位数(%)	H24
子どもとかかわる力	54(40%)	27(43%)
授業への取り組みに対する努力	39(29%)	19(30%)
教育実習生としての基本的態度	24(18%)	
実習に対する積極性や真摯な態度	11(8%)	7(11%)
授業での指導に関する事柄	7(5%)	9(14%)

表7から実習生が「教育実習生として評価できると思ったこと」として、昨年度と同様に何よりも「子どもとかかわる力」を挙げていることがわかる。まず、実習生がしっかりと子どもとかかわり実習に取り組もうとした姿勢が伺える。また次に説明力をもつカテゴリーとして平成25年度小学校教育実習に関する意識調査からは、「授業への取り組みに対する努力」を挙げている。これは、研究授業や日々の授業に向けて教材研究や指導案作成を頑張れたことに対する実習生自身の評価であると考えられる。次に提出物や日誌に関する「教育実習生としての基本的態度」が挙げられている事は、実習に際して実習生としての強い意識が結果として評価につながっていると考えられる。さらにその次に高い説明力を持つカテゴリーが「実習に対する積極性や真摯な態度」



であることから、全体的に、実習生自身は、実習生としての自覚をもち謙虚な態度で実習に臨んでいたと自己評価していることが読み取れよう。

## 2. 実習校の結果について

実習校が「教育実習生として評価できるといったこと」に対する自由記述では155の記述を記録単位数として分析対象とした。これらを松本ら（2013）1）が作成したカテゴリー（表8）から分類していく事とする。

**表8 (table. 8) 実習校が「教育実習生として評価できるといったこと」に関する分析カテゴリー表**

カテゴリー名
子どもとかかわる力
実習に対する真摯な姿勢や人間性
授業に対し取り組む姿勢
担当教員からの指導内容に関する真摯な対応

まず「児童との関わり」や「子どもとたくさん遊んでいた」、「多くの子どもと積極的にかかわる」という「子どもとかかわり方」に関する内容で構成される「子どもとかかわる力」というカテゴリーである。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同カテゴリーに分類されると考えられる記述が62記述見られ、全体の40%を占める第1カテゴリーである。この子どもと関わる力は昨年度と同用に実習校が最も高く評価している観点である。

次のカテゴリーは、「教職員に対する礼儀」「礼儀や真面目な姿勢」、「校内への作業の積極性」という内容で構成される「実習に対する真摯な姿勢や人間性」というカテゴリーである。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは同カテゴリーに分類されると考えられる記述が30記述見られ、19%を占める第2カテゴリーである。

さらに、「学習指導の実践」、「指導案への取り組み」、「教材研究」などの「授業に対し取り組む姿勢」というカテゴリーは本年度は23記述で15%を占める第3カテゴリーである。また「反省を次に生かす」、「指導内容の改善への取り組み」、「指導内容の素直な受け入れ」などの「担当教員からの指導内容に関する真摯な対応」というカテゴリーは本年度は21記述で、12%を占めるカテゴリーである。平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは昨年度は見られなかった、「何事にも意欲的に取り組む」、「意欲的に授業を行おうとする」等の「意欲的に実習に

取り組む姿勢」という内容に関する記述が21記述見られ、全体の14%を占める第4カテゴリーとして分類された。これらの記述は、礼儀や挨拶といった、「実習に対する真摯な姿勢や人間性」という実習生としての態度やマナーというカテゴリーと違い、「他の学年の授業も自分から授業を参観させてもらっていた姿勢」や「ICT等を積極的に活用しようとしていた」等の、教職に対する意欲の高さを表すカテゴリーであると考えられる。その為、別のカテゴリーとして新たに分類した。これらをまとめたのが表9である。

**表9 (table. 9) 平成25年度実習生に対する実習校が「教育実習生として評価できるといったこと」に関する分析カテゴリー一覧表**

カテゴリー名	記録単位数(%)	H24
子どもとかかわる力	62(40%)	20(43%)
実習に対する真摯な姿勢や人間性	30(19%)	15(33%)
授業に対し取り組む姿勢	23(15%)	6(13%)
意欲的に実習に取り組む姿勢	21(14%)	
担当教員からの指導内容に関する真摯な対応	20(12%)	5(11%)

表9から実習校が「実習生として評価できるといったこと」として、昨年度と同様に「子どもとかかわる力」を挙げていることがわかる。これらはこれまでに、幼稚園実習や保育実習、施設実習などで多くの子どもと接してきた事と関係があると考えられる。また次に説明力をもつカテゴリーとしてこちらも昨年度と同様に「実習に対する真摯な姿勢や人間性」が挙げられている事は、小学校実習においても、人間力の高さというものが評価されたということであろう。この「子どもとかかわる力」、「実習に対する真摯な姿勢や人間性」というカテゴリーから実習校が「実習生として評価できるといったこと」の記述の57%を占めている。さらに、平成25年度小学校教育実習における意識調査で新たに分類された「意欲的に実習に取り組む姿勢」を含め、その他の下位カテゴリーからも、人間性や、態度、姿勢、意欲等が実習生として評価されている観点であるといえよう。このことについて、実習校からの「実習生として足りないと思われること」に関する第2カテゴリー「自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如」との関連を考察すると、あくまで一義的な解釈ではあるが、実習生において、将来小学校教諭を目指す実習生と、目指さずに免許取得のみの実習生の意識



や意欲の違いとして捉えられると考えられる。両者の差異をなくし、免許取得のみの実習生に対しても自覚や責任感、意欲を持たせ実習に送り出すかは、本学部の今後の課題であると考えられる。実習参加に関する基準の厳密な選定など、制度の問題とも併せて考えていく必要がある。

### 3. 「教育実習生として評価できると思ったこと」について

以上の実習生、実習校が「教育実習生として評価できると思ったこと」に対する自由記述では実習生、実習校においての特徴を捉えることができた。両者のカテゴリに関して一覧表にまとめたのが表10である。

表10 (table. 10) 「教育実習生として評価できると思ったこと」に関する実習生と実習校の分析カテゴリ一覧表

実習生		実習校	
カテゴリ名	記録単位数 (%)	カテゴリ名	記録単位数 (%)
子どもとかかわる力	54(40%)	子どもとかかわる力	62(40%)
授業への取り組みに対する努力	39(29%)	実習に対する真摯な姿勢や人間性	30(19%)
教育実習生としての基本的態度	24(18%)	授業に対し取り組み姿勢	23(15%)
実習に対する積極性や真摯な態度	11(8%)	意欲的に実習に取り組み姿勢	21(14%)
授業での指導に関する事柄	7(5%)	担当教員からの指導内容に関する真摯な対応	20(12%)

表10より、実習生、実習校ともに「子どもとかかわる力」が全体の40%をしめる第1カテゴリである。これは実習生のみならず実習校からの評価においても、子どもとしっかりとかわりながら実習に取り組んでいたと評価する事ができる。この分析結果は昨年度と同様であり、本学部の実習生の長所として評価して良い観点であると考えられる。実習生では「教育実習生としての基本的態度」が第3カテゴリ、実習校では「実習に対する真摯な姿勢や人間性」が第2カテゴリとして評価が高い観点であった。実習生からは自分自身が4週間、「遅刻、欠席をせずに頑張れたこと」、「提出物の期限を守ったこと」、という基本的な態度に対する自己評価が高いことが伺える。実習校からは、「教職員に対す

る礼儀」、「真面目な姿勢」、「努力する姿勢」、「めあてをもって取り組んでいる点」という真摯な態度や人間性が評価されている。

また実習生では第2カテゴリに「教材研究に対して自分なりに頑張れたこと」、「指導案作成を頑張った」等の「授業への取り組みに対する努力」が、実習校からは第3カテゴリとして「教材研究を頑張っていた」等の「授業に対して取り組む姿勢」が分析された。一方で、実習校が「教育実習生として足りないと思われたこと」の第1カテゴリが「授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足」である。このことを考察するならば、取り組む姿勢は評価に値するが、その質的な内容の問題としては実習生の課題であると捉えているという事であると考えられる。繰り返しになるが小学校教育実習指導の中だけでなく、各教科指導と関連させながら指導作成力や教材研究に関する力量の育成は今後の課題である。

実習生からの記述の中では昨年度と同様に授業における成功体験による「教えた事を理解してもらえた」、「児童の実態を踏まえ指導ができた」など、「授業での指導に関する事柄」も第5カテゴリではあるが分類されている。またこちらも昨年度同様に、実習校からの記述の中で、「担当教員からの指導内容に関する真摯な対応」というものがカテゴリとして挙げられている。これらは、「反省を活かそうとしている」、「指導内容を解決しようと取り組んでいる」という実習を受け身的ではなく主体的に行おうとする姿が評価されているものであると言えよう。

## IV. 考察

これまでの結果を踏まえ平成25年度小学校教育実習における評価に関する考察を行う事とする。これまでの結果より「教育実習生として足りないと思われたこと」に関する観点としては、実習生では「授業に関する授業力・指導力不足」及び「授業に関する指導案作成力や教材研究不足による授業計画力不足」が、実習校では、「授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足」、「自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如」が上位を占めている。特に実習生と実習校の大きな違いとしては「授業に関する授業力・指導力不足」カテゴリである。

一方で「教育実習生として評価できると思ったこ

と」に関する観点としては、実習生及び実習校ともにカテゴリーやその説明力は昨年度とほぼ同様に、「子どもとかかわる力」で全体の40%以上が占められている。両者で微妙な違いがあるものの「授業への取り組みに対する努力」、「実習生としての基本的な態度」という観点が上位に挙げられている。これらをまとめて、「授業への取り組みを含む、実習生としての基本的な態度・姿勢」として評価観点とした。以上の結果より、教育実習の評価を5観点からまとめると表11になると考えられる。

表11 (table. 11) 「本学教育実習に関する評価」に関するまとめ

評価項目	評価の観点	
	実習生	実習校
子どもとかかわる力	高い	
授業への取り組みを含む、実習生としての基本的な態度・姿勢	概ね高い	
授業に関する授業力・指導力不足	低い	
自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如		やや低い
授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足	やや低い	低い

※実習生及び実習校で40%以上のものを高または低評価とし、20%から40%未満のものを概ね高またはやや低評価とした。

このように「子どもとかかわる力」、「授業への取り組みを含む、実習生としての基本的な態度・姿勢」に関しては高、概ね高評価であり、「授業に関する授業力・指導力不足」に関しては実習生で低評価であり、「自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如」に関しては実習校でやや低評価である。そして「授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足」に関しては実習生でやや低評価であり実習校で低評価として捉えられる。以上より、平成25年度の小学校教育実習における意識調査からは、高評価、または概ね高評価の観点は、昨年度同様に実習生、実習校ともに違いはないが、低評価またはやや低評価の観点において両者に違いがみられた。この違いには、実習校が一つの授業というものを日々の教材研究等の積み重ねや、教職に対する意識や意欲、熱意という観点と関連させて捉えており、まずもって実習生にはその部分を学んでほしいと考えているのに対して、実習生はある意味で不出来がはっきりと解り易い一つの授業のみの観点で評価をしている違いがあるのではないだろうか。今後、実習生と実習校におけるこの授業という営み

の捉え方に関してはより詳細な分析を行う事で、より実習生の質を高めるような指導を行うことができるであろう。

## V. おわりに

本研究は平成25年度小学校教育実習において実習生と受け入れ先の実習校に対して行った意識調査の結果を考察することで、今後の小学校教育実習指導改善への手がかりを得ることを目的とした。意識調査の結果より、評価できる観点として昨年度同様に「子どもとかかわる力」、「授業への取り組みを含む、実習生としての基本的な態度・姿勢」が見出された。これらはこれまでの幼稚園、保育所、施設等での実習経験が小学校教育実習においても活かされているということであり、本学部の学生の長所として高く評価できるものであると考えられる。今後の小学校教育実習指導においても提出物や、遅刻欠席等の指導等をこれまで以上に厳しく指導する事で高評価を保っていく必要があるであろう。

一方で特に実習校からは「授業に関する授業力・指導力不足」よりも、「授業に関する指導案作成力や教材研究、板書計画不足による授業計画力不足」という観点が低評価の観点として見出された。また、昨年度同様に、実習校における意識調査のその他の欄に、大学側の要望として「指導案作成や教材研究の指導」が複数記述として見られた。昨年度の意識調査の結果を踏まえ平成25年度の小学校教育実習では、より模擬授業演習の中で、教材研究や学習指導案づくりの時間を設けたが、来年度以降より質的に高めていく必要があるといえよう。このことに対する提案事項としては、現在以下の三点が重要であると考えられる。

### ① 一単元を通した模擬授業演習

これまでの模擬授業演習では、単元計画を作成し、その単元における一時間（例えば8時間中の2時間目）を模擬授業で行わせてきた。そして、次にまた違う教科や内容で単元計画を立てさせて模擬授業を行うという方法である。これまで以上に、授業そのものの力よりも、指導案作成力や教材研究力が求められているという現状からは、このような多くの教科や内容の単元計画を作成し、授業づくりを行うという経験の量的な側面は今後も重要であるが、同時に、一つの単元をじっくりと行うことによる経験の

質的な側面を考慮する必要があるのではないだろうか。これらは一単元全てを模擬授業で行うという方法である。このことにより、導入部と展開部の関係性を考えた授業構想や、教材研究がより深まりを見せるのではないかと考えられる。つまり、8時間中の2時間目を模擬授業で行うだけでは、それはそれとし考えられるが、次の時間に8時間中の3時間目を行うとなれば、2時間目の反省や授業として足りなかった部分を即検討して3時間目の授業づくりを考えなくてはならず、また当初の単元計画とズレが生じた場合は全体の構想も再検討しなくてはならないだろう。このことによってより、そもそも単元計画を立てることの意味を学び、形式的な単元計画の作成ではなく、実をもった単元計画の作成が可能になるのではないだろうか。またそのことが一時間一時間の授業を大切に構想することにつながるのではないだろうか。

このように、多くの教科や内容で模擬授業を行わせる経験の量的な側面と同時に、一つの内容をじっくりと行うという質的な側面を考慮に入れて、模擬授業演習を行うことで、より質の高い模擬授業演習になるのではないだろうか。このことは、小学校教育実習指導の講義の中だけでは時間的に厳しいことも考えられるため、各教科指導法における模擬授業演習とも関連させていく必要があるだろう。

## ② 児童役の学生の授業観察力を高める

二点目としては、児童役として授業に参加する学生の授業観察力を高めることである。模擬授業演習では、授業を行う学生の指導が主となってきたが、それだけでなく児童役として授業を受ける学生が、模擬授業を受けた後に、その授業に対する質の高い批評を行う事が出来るような力を育成する事も重要であると考えられる。授業をしっかりと分析できる力を持つことは、自らの模擬授業に対しても深く検討する事ができ、また他の学生の模擬授業に対する批評も有意義なものとなっていくと考えられる。今年度の小学校教育実習指導においては、児童役として模擬授業を受けた学生にも授業に対するレポートを毎週書かせたが、来年度以降は、授業観察力をより付けられるように指導していく必要があると考えられる。

## ③ 実際の小学校での研究授業への参加を促す

県内外で行われている小学校での研究授業に対し

て積極的に参加するように促していく事も重要であろう。やはり、研究授業として練られた授業を実際の現場の中で参観することで、学ぶことは非常に多いと考えられる。またその後の授業検討会に参加する事で、現場の先生方の授業づくりや教材研究に対するレベルの高い考え方に触れ、意識が高まっていくのではないかと考えられる。この研究授業への参加においては、平日のため、大学の他の講義との関連もあるため、小学校教育実習指導の講義だけで行える事ではないが、今後の提案事項として検討される課題であると考えられる。

以上の三点の提案事項を来年度以降の小学校教育実習指導における検討事項として考え、授業力向上に寄与するような実習指導を行う必要があるだろう。またこれらは、各教科指導法とも連携し検討する必要もあるだろう。つまりこれらの以上の三点の提案事項を踏まえ“小学校教育実習指導として”を越えて、“学科として”の教員養成の在り方について今後より詳細に議論されるべきであろう。

次に挙げられる課題としては実習に対する意識の問題がある。今回の調査からは「自覚や責任、積極性・熱意に対する欠如」カテゴリーが、昨年度の11%よりも大幅に増え24%を占めるカテゴリーとなっている。この問題は、昨年度に比べ、小学校教育実習を希望する学生が大幅に増えた問題との関連も考えられるが、実習公害へと繋がる重要な問題であると考えられる。将来、小学校教諭を希望するかしなやかに拘わらず、今一度、小学校教育実習の意義や意味を学生に指導していく必要があるだろう。また、実習参加に関する基準の厳密な選定など、制度の問題とも併せて考えていく必要があるだろう。

最後に、実習校における意識調査のその他の欄における記述で、最も多かったものが、昨年度と同様にインターシップや教育実習前後の教育ボランティアについてである。「もっとお願いしたい」や、「今後もお願いしたい」という要望も多数あった。また「実習の前に、見学実習に来るのも良いのではないか」等の記述も複数見られた。昨年度から課題として挙げていることではあるが、地域連携による教員養成としての特色を活かすためにも、教育実習以外においても教員養成段階の学生が学校現場に参加する機会を多く設ける必要もあるだろう。

本研究は継続的に行う事により意味のある研究であると考えられる。次年度以降においても教育実習



後の意識調査を行うことで、意識調査の項目の精選や継続的なデータ収集を行う必要がある。そのことがより詳細な年度間比較調査を可能にし、本学部の教育実習の質的向上のための基礎的データを蓄積する事が可能となるだろう。また成績評価等の量的なデータと関連させながらより詳細な分析を行う事で、より成果と課題について検討する事も出来るのではないだろうか。今後データを蓄積させることと同時に、より多面的な視点から詳細な分析を行う事が今後の課題であると考えられる。

### 引用・参考文献

- 1) 松本大輔・佐藤範男・二宮貴之・大城あゆみ  
(2013)「本学小学校教育実習に関する成果と課題についての一考察～実習生と実習校の意識調査からの考察～」西九州大学子ども学部紀要第4号, pp. 35-43.
- 2) Berelson,B：稲葉三千男・金圭煥約（1957）内容分析. みすず書房：東京.